

【ポスターセッション】

自殺ハイリスク者を支援する際に求められる知識・技術・態度

ーソーシャルワーカーによる支援のモデル構築の試みー

○ (独) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 氏名 小高 真美 (4702)

渡邊 恭江 ((独) 国立精神・神経医療研究センター・8362)

キーワード：自殺対策、実践モデル、研修

1. 研究目的

わが国の自殺者数は、平成10年に3万人を超えて以降、高い水準で推移しており、自殺対策は社会問題として取り組むべき喫緊の課題となっている。

自殺には、生活上のさまざまな要因が複雑に関係している。そのため自殺予防には、医学的、心理学的な知見から治療にあたる専門家だけでなく、自殺ハイリスク者の生活を幅広い視野で捉えて支援できる人材が求められている。その実現には、複雑な生活背景を網羅的にアセスメントし、自殺ハイリスク者と共に問題解決の糸口を見つけていく専門職として、効果的に自殺対策に取り組むための知識と技術を身に付けたソーシャルワーカーの役割は大きい。しかし、自殺ハイリスク者の効果的な支援のために、ソーシャルワーカーに求められる知識・技術・態度は明らかとなっていない。そこで本研究では、ソーシャルワーク業務において、自殺ハイリスク者を支援する際の支援行動やその際に用いる知識や判断基準、価値観等を質的に明らかにし、自殺ハイリスク者支援のための支援モデルの構築を試みた。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワーク業務において自殺ハイリスク者を支援したことがあるソーシャルワーカー10名(女性8名、男性2名)を対象とした聞き取り調査(1名につき1時間半程度)を実施した。対象者の選定基準は、①社会福祉士もしくは精神保健福祉士の国家資格を有する、②ソーシャルワーカーとしての経験年数が5年以上である、③ソーシャルワーク業務において、5名以上の自殺ハイリスク者の担当経験を有する、とした。

調査では、実際の自殺ハイリスク者支援事例(生存事例)を想起してもらい、誰(個人は特定せず、「自殺ハイリスク者本人」、「家族」などの意)に対して、いつ、どのような場合に、何を、どのように実施したのか、またその際にどのようなことを判断し、信じていたのか等について、調査対象者にインタビューした。面接は、対象者の同意を得た上で、ICレコーダーで録音し逐語化した。

得られたデータについては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)(木下1999)を用いて質的に分析した。本研究では、「ソーシャルワーカーは、どのような知識・技術・態度を用いて自殺ハイリスク者を支援していくのか」を分析テーマとして

分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、疫学研究に関する倫理指針と個人情報保護法、また関連法案・法規等を遵守するとともに、独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの倫理審査委員会で審査され、同センター総長の承認を受けて実施した。

4. 研究結果

M-GTAによる分析の結果、22概念と6カテゴリーが生成された。ソーシャルワーカーが自殺ハイリスク者を支援する際、基本的な態度としての『感覚のコントロール』が求められ、『対峙化の作業』を通じて自殺のハイリスクにある本人との関係性を構築する。その上で、『生きづらさの認識化』をすることで、自殺のハイリスクにある本人が置かれている状況を判断する。支援の際は『同じ道りを歩むチーム作り』が欠かせない。また適宜、『危機状態からの脱出』を支援し、自殺ハイリスク者本人の『生きる力の強化』を目指している。

5. 考察

これまでに、自殺対策のための研修は、自殺に関する正しい知識や自殺対策への前向きな態度、自殺ハイリスク者への適切な介入技術の習得に効果があると報告されている (Chagnon et al. 2007; Gask et al. 2006; Samuelsson & Asberg 2002)。一方、わが国では9割以上のソーシャルワーカーが、職業上、サービス利用者の自殺(既遂・未遂・念慮)に直面した経験があるにもかかわらず、その半数は、自殺対策に関する講演会、研修会、講義などへの参加経験がない (Kodaka et al. 2012)。また、ソーシャルワーカーを対象とした効果的な自殺対策研修の開発や普及も進んでいない。

本研究で明らかとなった知識・技術・態度は、日ごろ自殺ハイリスク者を支援するソーシャルワーカーが、自らの臨床活動を評価する上での指標となるだけでなく、今後、ソーシャルワーカーに焦点を当てた自殺対策研修プログラムの構成要素として活用されることが期待される。

※ 本研究は、科研費若手研究 B (22730469) の助成を受けたものである。